類型学研究（2014）　*13-33*

タガログ語の存在表現
――日本語の存在表現との対照から――

新居田　純野

1. はじめに

本稿では、日本語における存在・所有表現「がある」についてその意味的内容から「存在」「所有」「所属」「特性」「内在」「外在」「部分集合」「デキゴト」に分類し、その多岐にわたる意味的な内容に対してタガログ語ではどのような表現形式で表わされるのか、どのような特徴があるのかについて考察していく。本稿では、まず第2節で日本語の存在動詞「ある」に関わるいくつかの立場に触れ、第3節では、本稿における日本語の「がある」構文の八分類について、第4節では、3節での日本語の分類をもとにしたタガログ語での表現形式について、用例をあげながら考察を行う。

また、本稿で扱う存在・所有表現は肯定文のみを対象としている。

2. 存在動詞「ある」に関する先行研究

存在動詞「ある」については、これまでに多くの研究がみられる。それらの研究の流れについては、大塚(2004:112)には以下の四つがあげられている。

1. 形式動詞「ある」の研究
2. 存在動詞「ある」の研究（『いる』との比較）
3. 状態動詞「ある」の研究（アスペクト研究）
4. 機能動詞「ある」の研究

これらの研究の詳細については、大塚に詳しく述べられているので参照されたい。ここでは、２にあげられている存在動詞「ある」について、「意味・用法の違いから共起する名詞の種類までを記述した研究」をもとに考察を進めていく。

三上（1970：46-49）では、「存在文というのは、モノの存在、言語によってはモノの所有をもあらわす文である」として、次のような例をあげてそれぞれの意味的内容を定めている。

①机の上に本があり、イスの上にはネコがいる。（存在）
②笛には、縦笛と横笛があります。（類概念と種概念）
③バラの木には、とげがある．（密着）
④私には、妻子がない。（所有）

高橋･屋久（1967：1-42）では、小説等に書かれた資料をもとに、そこにみられる表現形式「ある」を、その形態論的な特徴、文脈との関係などから次の五つに分類している。

①空間的な存在
②範囲・わくぐみの中の存在
③おこり・おこなわれとしての存在
④所有されるもの・所属するものとしての存在
⑤経験としての存在

また、金水（2003:40-41)では、主語（持ち手）と対象（持たれるもの）との意味的関係に着目して、以下のように分類している。用例はすべて金水（2003）に提出されているものである。

① 手で持つ動作（動的な用法は切り捨て、「持っている」という静的な意味に限る）
　田中さんの手には今、フォークとナイフがある。
② 社会的所有
　田中さんには妻がある／いる。
　田中さんには莫大な財産がある。
③ 思考・感情・感覚
　わたしには悪い予感がある。
④ 全体・部分（身体部位）
　田中さんにはほくろがある。
　この椅子には肘掛けがある。
　この町は南の端に森がある。
⑤ 能力・性質・特徴
　1.　身体能力・特徴

田中さんにはたぐいまれな跳躍力がある。

2. 精神的能力・特徴

田中さんには人並み外れた精神力がある。

3. 外面的性質

タマムシには美しい色がある。（「ある」では表現しにくい。）

4. 抽象的性質

この土器には歴史的な価値がある。

新居田（1999）では、「がある」構文を「Y ニ X ガアル」形式として、X と Y の組み合わせ、および、X と Y の関係から「X がある／いる」のあらわす意味的内容を「存在」「所有」「所属」「外在」「（デキゴトの）実現」の五つに分類することを提案し、さらにそれぞれの下位分類を示した。

(1)　存在（存在現存、存在提示、観念的存在、部分集合）
(2)　所有（所持、所有、特性、内在）
(3)　所属（モノの所属（全体・部分）、人の所属）
(4)　外在（時空的存在、社会的生産物存在、知的生産物存在、非テンス性デキゴトの存在）
(5)　実現・デキゴト（行事／習慣、一回起こりのデキゴト、時々起こりのデキゴト）

以上のように、「がある」構文については、これまでに様々な視点から分類が試みられてはいるが、まだ確定的な分類は出されていないのが現状である。

しかし、これまでの「がある」構文の分類をもとに、様々な言語における存在・所有の表現形式を対照していくことで、「がある」構文の分類は段階を追って精密化され、その違いを明らかにしていくことが可能であると筆者は考える。

そこで、本稿では、新居田（1999）での分類に幾分か修正を加え、「Y ニ X ガアル」を「存在」「所有」「所属」「特性」「内在」「外在」「部分集合」「デキゴト」の八分類とし、その分類にそってタガログ語における存在・所有表現をみていくことにする。「部分集合」は、多くは明示されていない全体集合における部分集合として提出されるものであり、存在場所が必要とされる「存在」とは別分類とする。また、人が人や物を所有する場合と、人や物や事にその属性などがある場合を「所有」としたが、ここでは、人が人や物などの具体物

を所有する場合を「所有」とし、人や物や事にその属性などがある場合を「特性」、感覚や感情、思考などの存在を「内在」として、「所有」と区別した。

3. 日本語における存在・所有表現「Y ニ X ガアル」について

本稿では、「Y ニ X ガアル」を、X と Y の意味的な関係から「存在」「所有」「所属」「特性」「内在」「外在」「部分集合」「デキゴト」の八分類とした。ここでは、それぞれの表現形式と用例をあげていく。（用例の出典は新居田（1999）参照）

3.1　「存在」

「存在」とはある場所に具体物が存在することとする。したがって、表現形式は「存在場所（Y）ニ／ニハ　存在するモノ（X）ガアル」となり、X が有情物の場合は「いる」が使用される。

(3-1) 机の上に本がある。

(3-2) 母親の隣に子供がいる。

3.2　「所有」

「人が人を所有する」「人が物を所有する」というように、具体物を所有することを「所有」とし、抽象的なものの所有となる「特性」「内在」とは区別する。

「X がある／いる」形式が「所有」をあらわす場合、「所有者（Y）ハ／ニハ　所有するモノ（X）ガアル」形式をとり、X が人の場合は「ある／いる」のどちらかが使用される。

(3-3) 彼女は恋人がいる。

(3-4) わたしには妻子がある。

(3-5) 私は家がある。

X が性格や能力などであれば、Y の「特性」となって「X がある」が所有者である人の属性をあらわすことになる。外的なこととの関わりによって人の精神的なものとして生じる思考や意識や感情などであれば、本稿では「特性」と区別して「内在」という名づけをした。

3.3　「所属」

「所属」には「人の所属」をあらわす「人やその集合体である一定の範囲やわくぐみに人やその集合体が所属する」場合と、「物の所属」をあらわす「ある物（全体）にその物の部

分が所属する」場合がある。そして、「物の所属」の場合「全体」に対して「部分」が所属することになり、物（全体）にその構成部分が所属する場合と、人（全体）にその身体部分が所属する場合がある。

「物の所属(全体と部分)」

「所属場所（Y）ニ／ニハ　所属するモノ（X）ガアル」

(3-6) その机には引き出しがある。

(3-7)サンタクロースには白い長い髭がある。

「人の所属」

「ある一定の範囲や枠組み（Y）ニ／ニハ　人やその集合体（X）ガアル」

(3-8)その会社にはもうひとつ編集部があった。

(3-9)営業部には3人の営業マンがいる。

3.4　「特性」

特性をあらわす文とは、所有者（X）がそのX固有の性質や能力や属性などを持っている場合の表現である。恒常的な存在となり、「特性の持ち主（Y）ハ／ニハ　特性（X）ガアル」となる。

(3-10)彼女は能力がある。

(3-11)彼女には爪を噛む癖がある。

(3-12)そのブラウスには光沢がある。

3.5　「内在」

「内在」とは、ある物の内部に存在するという意味でなづけている。本稿では外的なこととの関わりで人の内面に生じる感覚や感情や思考、意識などの所有を「特性」と区別して「内在」としていて、「内在の持ち主（Y）ハ／ニハ　内在するモノ（X）ガアル」となる。恒常的な存在である「特性」とは異なり、「内在」は非恒常的な存在となる。

(3-13)母親は子供に対する愛情がある。

(3-14)彼は背中に痛みがあった。

3.6　「外在」

「外在」とは、「人やある範囲・枠組み（Y）ニ／ニハ　外在するコト（X）ガアル」の形式をとって、時、空間、社会的生産物、知的生産物、過去のある時の事象がテンス性を失って存在する場合をいう。存在場所は人や社会などの枠組みなどである。ここで、社会的生産物として扱っているものは、人やものをとりまく社会との関わりから生じる外来的な事象である。これらの事象は人をとりまく社会というものが存在しなければ生じ得ないものなので、人間やものが本質的に持っているものではなく、他のものとの比較や関わりなどの接点を持つことによって生じる事象と考える。

(3-15)明日の朝までまだ10時間もある。

(3-16)彼には仕事がある。

(3-17)私と彼には不思議な因縁がある。

(3-18)私は用がある

(3-19)社会にはいろいろな規則がある。

テンス性を失ったデキゴトとは、過去においてのデキゴトの結果が現在には経験として残っていたり、あるいは、未来におけるデキゴトがまだ実現してはいないが、いずれ実現する可能性を持って人に存在する場合である。

(3-20)彼女は来週用事がある。

(3-21)彼にはつらい経験がある。

3.7　「部分集合」

「部分集合」をあらわす文とは、全体集合の中にある共通の性質を持った集合体が部分集合として存在することを示す文のことである。この部分集合という名づけは寺村(1982:159)による。三上（1970：46）では、「類概念と種概念」と名づけている。

特定のある条件をもった全体集合というものがあり（明示されているか暗示されているかは別として）、この抽象的な空間においてある一定の条件を備えた要素の集合を部分集合とみなすことができる。これは「ある条件をもった全体集合における特徴的な性質を共通に有する要素があり、それらを部分集合と名付けることができる」という考え方で、「（Yニ／ニハ）部分集合となるモノ（X）ガアル」となる。

新居田(1999)では「部分集合」は「ある枠組みにおける存在」と考え「存在」に分類したが、本稿では部分集合の母体である全体集合が必ずしも具体的な存在場所となるわけではないので、「部分集合」として「存在」とはわけて扱うことにする。

(3-22)病気をしても絶対に病院に行かないという人がいる。

(3-23)鶏肉が嫌いだという人がいる。

(3-24)最近では若者に人気のあるフェイスブックというのがある。

3.8　「デキゴト」

「デキゴトの実現」とは、あるデキゴトが特定の時間に実際に起きている、あるいは実際に起きたという場合で、「時間軸上に局在して実際に起きること」とし、「デキゴト（X）ガアル」となる。

(3-25)明日 10 時から会議がある。

(3-26)昨日午前中に授業があった。

デキゴトの行なわれる場所が「で」格をともなって共起する。

「電話」「手紙」「テスト」「花火」などのようにX自体がデキゴト性を帯びてくると、「ある」が文中で他の動詞の置き換えとなっているとも考えられる。

(3-27)今朝、母から電話があった（かかってきた）。

(3-28)昨日、友達から手紙があった（きた）。

(3-29)今日は学校で英語のテストがある（行なわれる）。

(3-30)明日、江ノ島で花火がある（打ち上げられる）。

「デキゴト」の実現をあらわす場合、多くは過去形が過去のデキゴトを、非過去形が未来のデキゴトをあらわす場合が多い。

以上のように、日本語の「がある」構文を意味的内容から「存在」「所有」「所属」「特性」「内在」「外在」「部分集合」「デキゴト」の八分類としたが、これらがタガログ語ではどのように表現されるかを第4節ではみていくことにする。

4. タガログ語における存在・所有表現について

タガログ語では、基本的に述部は文頭に置かれる。その他の補語は述部に後続するが、主格標識辞（ANG）に導かれるものが主語として機能する。（大上 1994, 2012）

存在・所有表現は存在詞の may／mayroon が使用される。ここでは、大上（1994:88-91、168-171、2012:46-49、58、94、192-193,用例は 1994 より引用）をもとにタガログ語の存在・所有表現を簡単にまとめておく。本稿では肯定文のみを扱い、否定文は扱っていないので存在・所有の否定を表わす wala については省略する。

a.所有表現

存在詞と呼ばれる may／mayroon を使用して以下のような語順で所有を表す。表現形式は以下のようになる。

1.may＋補語（所有するモノ）＋所有者（ANG 形[1]）

2.mayroon＋リンカー[2](mayroong)＋補語等（所有するモノ）＋所有者（ANG 形）

mayroon では、所有者が人称代名詞の ANG 形の場合以下のような語順になる。

3.mayroon＋所有者（人称代名詞：ANG 形）＋リンカー＋補語(所有するモノ)となる。

may＋所有するモノ＋所有者（ANG 形）

(4-1) May aso ako.

犬　私（ANG 形）

私は犬を持って（飼って）いる。

(4-2) May anak si Gng. Santos.

子供　　サントス夫人（ANG 形）

サントス夫人には子供がある。

mayroon＋所有するモノ＋所有者（ANG 形）

(4-3) Mayroong pusa si Helen.

猫　　ヘレン（ANG 形）

ヘレンは猫を飼っている。

mayroon＋所有者（ANG 形）＋所有するモノ

---

[1] ANG 形　主格（主語、特定）を表す標識辞で、固有名詞の場合は si、人称代名詞・指示代名詞の場合はそれぞれ固有の形をとる。

[2] リンカー　修飾語と被修飾語をつなぐ役割をする。前の単語が母音で終わっている場合は、語尾に-ng をつけ、子音で終わっていれば na を独立させて後続させ、n で終わっていれば g をつける。

(4-4)Mayroon pa　siyang　　lagnat.

まだ　彼女（ANG 形）＋リンカー　熱

彼女はまだ熱がある。

b. 存在表現

所有表現と同様、存在詞と呼ばれる may／mayroon を使用して同様の語順で存在を表すが、所有と異なるのは、ANG 形が共起せず存在場所が場所標識辞 sa[3]＋場所で表わされることである。

(4-5)May baka sa likod ng bahay.

牛　　裏　　家

家の裏に牛がいる。

(4-6)Mayroong pista rito sa Mayo.

祭り　ここ　　五月

ここでは五月に祭がある。

d. 不定表現

特定のものではなく、「～という～がある」という、不定の何かについて言及する場合の表現である。「may/mayroon＋存在するモノ＋各焦点動詞[4]／疑似動詞[5]」となるが、存在するモノであるヒト(tao＋リンカー：taong)、コト・モノ（bagay+na）、バショ（lugar）が省略されることが多い。

(4-7)Mayroong（taong）dumating kahapon.　（行為焦点動詞）

人　　来る　　昨日

昨日来た人がいる。

(4-8)May（taong）ayaw kumain ng hipon.（行為焦点動詞）

人　　嫌い　食べる　　海老

---

[3] 標識辞 sa は場所、方向、時、道具などの名詞句を標示する。人称代名詞や指示代名詞にはそれぞれの SA 形がある。

[4] 焦点　文の中で主題(話題の中心)が何であるかを示す述語の形式で、行為者焦点動詞／対象者焦点動詞／方向焦点動詞／受益者焦点動詞／手段焦点動詞がある。

[5] 疑似動詞　動詞のような意味をもつが、動詞のように活用しないもので、文法的には形容詞類に分類される。gusto「好きである」、ayaw「嫌いである」、kailangan「必要である」など。

海老を食べるのが嫌いな人がいる。

(4-9)Mayroon　(bagay na)　akong　　iniisip ngayon.（対象焦点動詞）

こと　　私（ANG 形）　考える　今

わたしには今考えていることがある。

(4-10)May（taong）　bibigyan si Jiro ng tsokolate　　bukas.（方向焦点動詞）

人　　あげる　次郎（ANG 形）チョコレート　明日

次郎には明日チョコレートをあげる人がいます。

(4-11)Mayroon（taong）siyang　　gusting ipagluto ng adobi.（受益者焦点動詞）

人　　彼女（ANG 形）　　好きな　料理　　アドボ

彼女にはアドボを料理してあげたい人がいる。

(4-12)Mayroon akong　　ipampupunas ng salamin.（手段焦点動詞）

私（ANG 形）　　拭く　　メガネ

私はメガネを拭くものを持っている。

(4-13)may（taong）gusto ng kahin　ditto.（疑似動詞）

人　　好き　　食べる　ご飯

ここにご飯の好きな人がいる。

(4-14)may kailangan ako　　sa kanila.（疑似動詞）

必要　　私（ANG 形）　彼ら

私は彼らに用がある。

以下、日本語における存在・所有の表現形式との対照から、タガログ語における存在表現について、現段階までに得られた調査用例[6]および、これまでの先行研究をもとに考察をおこなう。

4.1　「存在」

---

[6] 特にことわりのないデータは、フィリピンのセブ在住の 30 代後半の女性による用例である。そのほかに、大上（1994）（2012）、その他で出されている用例も使用しているが、この場合は用例のあとに出典を示した。例：（大上 1994:222）

「存在」はmay／mayroonを使って表わされるが、日本語の「ある」「いる」のような有情物か非情物による使い分けはない。「存在」の場合、存在するものには主語として機能するためのANG標識辞はつかない。日本語の「に」格によって提示される存在場所は「sa（標識辞）＋場所名詞」で表わされ、表現形式は以下のようになる。

may/mayroon(g)+存在するモノ＋存在場所

(4-15)May isang bata sa tabi ng kanyang ama.

1人の こども そば 彼の 父

父親のそばに子供がいる。

(4-16)May maliit na tricycle sa harap ng gate ng bahay.

小さい 三輪車 前 玄関 家

玄関の横に小さな三輪車があった。

(4-17)Mayroong piano sa loob kainan ng hotel.

ピアノ 宴会場 ホテル

ホテルの宴会場にピアノがあった。

4.2 「所有」

本調査の被調査者による「所有」の表現形式の多くは、述部と主部が倒置してANG標識辞所有者が文頭におかれ、倒置を示す標識辞ay[7]が存在詞の前に出てくる。これは、大上(1994、2012）における「所有」表現の所有者（ANG形）が文頭にきて倒置が起きたものであり、本稿では所有者が主題化[8]されたととらえた。

所有者（ANG形）+ay+may+所有するモノ（＋所有場所（sa標識辞））

(4-18)Siya ay may pangalawang bahay.

彼(ANG形) 第二の 家

彼には別荘がある。

(4-19)Ako ay may asawa.

---

[7] ayは「倒置」を示す標識辞である。

[8]本稿では、倒置によって主部が文頭に来る場合、主題化されたととらえた。

私(ANG 形)　夫

わたしには夫がある／いる。

(4-20)Ako ay may nobyo sa Hokkaidoh.

私(ANG 形)　婚約者　北海道

私は北海道に婚約がいる。

4.3「所属」

「所属」は、所属するものの所属場所が組織などの枠組みであれば「存在」と同じ表現形式となるが、これは会社や学校などの組織という枠組みにその所属するものが存在するというとらえ方となるからであろう。

mayroon/may+所属するモノ+所属場所（sa 標識辞）

(4-21)Mayroon labinlimang guro　sa paaralang iyon.

15　先生　学校

あの学校には 15 人の教員がいる。

(4-22)May tatlong lalaki at limang babae sa seksyon na ito.

3　男　そして　5　女　この課

この課には三人の男性と、五人の女性がいる。

所属するものが所属場所の部分である場合（全体と部分の関係）は、その所属場所が文頭に出てきて ANG 形をとって所属するものの所有者とみなされ、「所有」と同じ表現形式をとる。

所属場所（ANG 形）+ay+may+所属するモノ

(4-23)Ang pupitre na ito ay may malaking kahon.

机(ANG 形)　大きな　引出し

この机には大きな引出しがある。

(4-24)Ang matandang usang lalaki ay may sungay.

牡鹿(ANG 形)　角

牡鹿には角がある。

(4-25)Siya ay may tatlong subordinates.

彼(ANG 形)　3　部下

彼には三人の部下がいる。

しかし、(4-26) のようにその所属場所が会社という組織であっても、文頭に置かれて主題化はされないが、ANG 形を取る場合もあった。

(4-26)Mayroong departmento sa pag -edit ang kompanya nila.

編集部　会社(ANG 形)

あの会社には編集部がある。

4.4　「特性」

「特性」は、特性の持ち主が特性を所有するというとらえ方で表わされ、特性の持ち主が文頭に来る倒置文となり、「所有」と同じ表現形式をとる。

特性の持ち主 (ANG 形) ＋ay+may+特性

(4-27)Siya ay may kakayahan.

彼(ANG 形)　能力

彼には能力がある。

(4-28)Siya ay may init.

彼女(ANG 形)　温かみ

彼女は性格にやさしさがある。

(4-29)Siya ay may matamis na tinig.

彼女(ANG 形)　艶　声

彼女の声には艶がある。

また、(4-30)のようなものの特性を述べる場合は、存在詞ではなく状態を表わす形容詞が用いられた。

(4-30) Ang blusa na　yari sa seda ay kumikintab.(述部と主部の倒置)

ブラウス(ANG 形)組成　絹　光沢

絹のブラウスは光沢がある。

4.5　「内在」

「内在」は、ANG 形の持ち主と内在するものが述部に後続する、大上（1994,2012）で提示された「所有文」と同じ表現形式で表わされる。

may/mayroon＋内在するモノ・内在するモノの持ち主（ANG 形）

(4-31)May kaya　sila　　sa buhay.

　　能力　彼ら（ANG 形）　生活

　彼らは生活力がある。

(4-32)Mayroon pa siyang　　lagnat.　（大上（1994:89）

　　彼女（ANG 形）　熱

　彼女はまだ熱がある。

内在するものが意志性の強い場合は、その意志の所有者が文頭におかれた倒置形式となり、「所有」と同じ表現形式になる。

内在するモノの持ち主（ANG 形）＋ay+may+内在するモノ

(4-33)Siya　ay may tiwala　sa kanyang puso.

　　彼（ANG 形）　確信　　彼の　心

　彼は確信があった。

(4-34)Siya　ay may ambisyon.

　　彼は（ANG 形）　野心

　彼には野心がある。

4.6　「外在」

「外在」はある枠組み（社会や世界等）に外在的なことが存在する場合であるが、その枠組みが明示されない場合も多く、そのような「外在」の場合は「may/mayroon＋外在するコト」で表わされる。

may/mayroon＋外在するコト

(4-35)Mula ngayon, mayroong anim o　pitong　　oras hanggang bukas ng umaga.

　　から　今　　6　あるいは　7　　時間　まで　明日　　朝

　翌朝まで七時間ある

また、外在することの存在する場所が共起するのであれば、その存在場所は「sa＋場所」で表わされる。

(4-36)May ibat- ibang mga patakaran sa lipunan.
いろいろな　規則　社会
社会にはいろいろな規則がある

その外在すること（外在的なこと）が人に関わる場合は、「内在」と同様、その関わる人は外在することの持ち主としてANG形となる。

mayroon＋持ち主（ANG形）＋外在するコト

(4-37)Mayroon siyang trabaho.
彼（ANG形）　仕事
彼には仕事がある。

may＋外在するコト＋持ち主（ANG形）

(4-38)May trabaho siya.
仕事　彼（ANG形）
彼には仕事がある。

「～したことがある＝～した経験がある」の場合は、「～を得る、持つ」の語根であるroonに接辞magkaがついた行為者焦点magkaroon＋経験（karanasan）で表わされる用例が多かった。接辞magka-は非意図的に語根の意味するものを所有したり、そういう状態になることを表す。(magkapero=magka-pero(金)：金を得る)

magkaroon+経験者(ANG形)+経験

(4-39)Nagkaroon ako ng[9] karanasan na nakipag-away sa isang kaibigan
（完了相）　私（ANG形）　経験　喧嘩　友人
友達と取っ組み合いのけんかをしたことがある。(私は友人とのけんかの経験がある)

---

[9] ここのNG形は他動詞構文における主語以外の中心的な補語（動作主、動作の対象など）を表わす標識辞であるが、所有を表わす場合もある。

4.7　「部分集合」

「部分集合」は、焦点動詞によって説明が加えられた人やものやことなどが、その人やものやことの集合体である全体集合に存在することを表わし、大上（1994: 168-171、2012: 192-193）の「不定表現」に相当する。

may/mayroon(g)＋存在するモノ(省略されることもある)＋焦点動詞／疑似動詞

(4-40)May mga taong　ayaw　p-um-unta sa ospital kahit may sakit.

人　好き　行先　病院　もし　病気

病気をしても絶対病院に行かない人もいる。（疑似動詞）

(4-41)May mga taong　ma-ta-tangkad,　at may mga maiikling mga tao rin.

人　高さ-行為者焦点 そして　低い　人　また

背の高い人もいれば、低い人もいる。

(4-42)May mga computer　na hindi nasisira　kahit ito ay nahuhulog.

コンピューター　否定　故障-行為者焦点　もし　落下

落としても絶対壊れないコンピューターもある。

4.8　「デキゴト」

「デキゴト」はデキゴト性をもつ名詞に、そのデキゴトが起こる時や場所が共起する。

may/mayroon(g)/ magkaroon＋デキゴト（＋時、場所）

(4-43)May klase bukas.

授業　明日

明日授業がある。

(4-44)Mayroong pista rito sa Mayo.

祭り　ここ　5月

ここでは五月に祭がある。

(4-45)Mayroong inabanduna　na bata sa harap ng ospital.

放棄された　こども　前　病院

病院の前に捨て子があった。

(4-46)Magkakaroon ng pagtatagpo bukas ng umaga.

未然相　会合　明日　朝

明日は朝から会議がある。

(4-47)Nagkaroon ng aksidente na nagresulta ng pinsala o pagkamatay sa may subway.
完了相　事故　結果　怪我　あるいは　死　地下鉄
地下鉄で人身事故があった。

個人に関わる習慣的なデキゴト、繰り返されるデキゴトなどは、そのデキゴトの所有者はANG形で示される。

may＋デキゴト＋デキゴトの持ち主（ANG形）
(4-48)May sulat na naman ako　galing sa aking ina.
手紙　また　私(ANG形)　から　私　母
また母から手紙があった。

mayroon/magkaroon＋デキゴトの所有者（ANG形）＋デキゴト
(4-49)Tuwing Oktobre mayroon kaming　pagdiriwang.
毎年の10月　私たち（ANG形）　祭り
毎年十月に祭りがある。
(4-50)Mayroon akong　kalse araw-araw mula alas diyes ng umaga.
私（ANG形）　授業　毎日　から　10時　朝
毎朝十時から授業がある。
(4-51)Magkakaroon kami　ng mga paputok　dito　daungan bukas.
未然相　私達（ANG形）　花火大会　港　明日
明日、この港で花火があります。（私たちは明日この港で花火大会を持つ）

4.9　まとめ

以上に、用例とともに示したタガログ語における各表現形式と意味的内容をまとめると表1のようになる。

表１　タガログ語における存在・所有の表現形式

	意味的内容 表現形式	存在	所有	所属	特性	内在	外在	部分集合	デキゴト
Ⅰ	①may/mayroon+X+Y ②may/mayroon/magkaroon+X	○		○			○*2		 ○*5
Ⅱ	Y(ang)+ay may +X		○	○*1	○	○			
Ⅲ	①may+X＋Y(ang) mayroon＋Y(ang)＋X ②magkaroon＋Y(ang)＋X		○			○	○*3 ○*4		○*6 ○*6
Ⅳ	may/mayroon+X+V							○	

*1　全体と部分の関係
*2　個人に関わらずに外在するコト
*3　個人に関わって外在するコト
*4　経験の所有
*5　非個人的なデキゴト
*6　個人に関わるデキゴト

タガログ語における「存在・所有」の表現形式からみると、「存在」「所属」は基本的には同じ表現形式Ⅰ-①をとるが、「所属」では所属場所と所属物が全体と部分の関係にあるときは表現形式Ⅱになる。「所有」は、大上（1994,2012）であげられているようにⅢ-①の表現形式もみられたが、本調査ではANG形所有者が文頭に来ることで主題化され、述部・主部の倒置が起きている表現形式となるⅡの用例が多かった。「特性」は有情物や非情物のもつ普遍的な特徴であるが、その持ち主が有情物の場合の表現形式は「所有」と同じⅡのみとなった。「内在」はその内在するものの持ち主が示される表現形式Ⅲ-①が基本形式となるが、内在するものが所有者の意志性の強い場合は、「所有」と同様に所有者が主題化されて文頭におかれる表現形式Ⅱでも表わされる。「外在」は外在することが個人に関わらない場合はⅠ-①で、個人に関わることであればⅢ-①、さらに個人の経験「～したことがある／経験がある」の場合は、焦点動詞の「magkaroon＋経験」のⅢ-②の表現形式となる。このように、いくつかの表現形式が使用されるのは、「外在」の分類がその意味的内容のとらえ方によって単なる「存在」、あるいは、人が関わる「所有」、テンス性をもつ「デキゴト」と非常に近い関係にあることを示していると思われる。「部分集合」では、日本語と違って特徴的な表現形式が使用されていて、「部分集合」にあたる存在するもののもつ特徴が焦点動詞や疑似動詞で提示される。「デキゴト」は、基本的には時や場所が共起してデキゴトが存在するという表現形式Ⅰ-②をとるが、個人的なデキゴトになると、ANG形所有者が共起したⅢ-①の表現形式となる。一方、一般的なデキゴトの場合は「外在」の経験と同じ表現形式で

ある「magkaroon+デキゴト」となり、「外在」と「デキゴト」との境界が曖昧であることが示されている。

5. おわりに

日本語とタガログ語の表現形式をまとめると、3節、4節より以下のようになる。

表2　日本語とタガログ語における存在・所有の表現形式の対照

意味的内容	日本語	タガログ語
存在	Y ニ／ニハ X ガアル	may/mayroon(g)+X+Y
所有	Y ハ／ニハ X ガアル	Y(ang)+ay+may＋X may +X＋Y(ang)／ mayroon＋Y(ang)＋X
所属	Y ニ／ニハ X ガアル	may/mayroon+X＋Y Y(ang)+ay may +X（全体・部分）
特性	Y ハ／ニハ X ガアル	Y(ang)＋ay+may+X
内在	Y ハ／ニハ X ガアル	may +X＋Y(ang)／ mayroon＋Y(ang)＋X Y(ang)＋ay+may+X
外在	（Y ニ／ニハ）X ガアル	may/mayroon＋X(+Y)（非個人的） may＋X＋Y (ang)／mayroon＋Y(ang)＋X（個人的） magkaroon+Y(ang)+X(経験)
部分集合	（Y ニ／ニハ）X ガアル	may/mayroon+X+V(焦点動詞、疑似動詞)
デキゴト	X ガアル	may/mayroon/magkaroon＋X(+時、場所)（非個人的） may＋X＋Y (ang)／mayroon＋Y(ang)＋X（個人的） magkaroon+Y(ang)+X(個人的)

日本語における存在・所有の表現形式は「Y ニ／ニハ／ハ　X がある」で表わされるが、この構文形式を意味的内容から分類するには、X と Y の語彙的意味や関係、または文単位での意味的内容によって分類していくことになる。しかし、構文形式からの裏付けがないため、分類基準が非常にあいまいである。そのため、これまでに様々な分類が議論されてきたが、「各項目は断絶している訳ではなく、むしろ中間的な表現を介して連続しているとみるべきである。」、「「ある」について言えば、場所と存在物との関係を原型として、各種所有関係へと拡張されていったのであろう」と金水（2003:41-42）でも述べられているように、日本語と同様、タガログ語でも「存在」「所属」「外在」「デキゴト」が同じ表現形式を取っており、「所有」「所属」「特性」「内在」では ANG 形所有者が共起した同じ表現形式をとっている。つまり、タガログ語では、X の存在場所となる Y が X の存在する場所とみなされれば「場所標識辞 sa＋Y」となり、所有者とみなされれば ANG 形となる。この点から「存在」

と「所有」は区分されているが、このことは、日本語における存在・所有表現が「Yニ／ニハ」となれば「存在」に、「Yハ／ニハ」となれば「所有」に区分されることと同様であると考えられる。そして、このことは、存在・所有表現の分類は存在物の存在場所、所有物の所有者という観点からなされるべきであることを示唆しているとも受け取れる。このように、各言語と日本語とを対照することで、日本語における存在・所有表現の分類についても再検証していく手がかりを得られるという点からも、今後さらに、各言語における存在・所有表現を詳細に分析し、対照比較していくことで、日本語の「がある」構文の意味的内容からの分類の再構築の提案をしていきたいと思う。

【付記】

本稿は2013年-2015年度文部科学省科学研究補助金（基盤研究C）「台湾原住民語および東南アジア、東アジア諸言語における存在・所有表現について」）の助成を受けている研究に基づく。

参考文献:

大上正直（1994）『フィリピノ語文法入門』白水社。

大上正直／ジェニー・ヨシザワ（2012）『世界の言語シリーズ6　フィリピン語』大阪大学出版会。

大上正直（2004）「タガログ語の可能表現――意味論的・語用論的視点からの形式・意味・用法の分析――」『大阪外国語大学論集大』30号，pp.51-71.

大塚　望（2004）「「～がある」文の多機能性」『言語研究』125，pp.111-142.

金水　敏(2003)「所有表現の歴史的変化」『月刊 言語』Vol.32.No.11，大修館書店，pp.38-44.

塩原朝子（2008）「タガログ語の「動詞」と「名詞」の区別――述語の談話的特性からの解釈――」Asian and African Languages and Linguistics，No.3，pp.97-115.

高橋太郎・屋久茂子（1984）「『～がある』の用法――（あわせて）『人がある』と『人がいる』の違い――」『研究報告集』5，東京:国立国語研究所，pp.1-43.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味　第I巻』くろしお出版。

新居田純野（1998）「人の所有を表す表現について――「人がある／いる」と「人をもつ」の両形式の分析から――」『言語学と日本語教育――実用的な言語研究の構築をめざして――』，くろしお出版，pp .245-253.

――――(1999)「局在（locative）について――「ある」「いる」を例にして――」『国文学解釈と鑑賞』1月号，至文堂，pp. 85-94.

――――(1999)「『ある／いる』構文の研究」博士論文. お茶の水女子大学。

――――(2004)「人の《特性》と《状態》をあらわす存在文「～がある」形式について」『日本語文法』4巻2号，くろしお出版，pp. 202-213.

――――(2006)「存在動詞における「遠/近」「可視/不可視」」『国文学解釈と鑑賞』1月号，至文堂，pp. 164-173.

――――(2010)「シタコトガアル-シタ経験ガアル、シタ経験ヲモツとの対照から」『日本語形態の諸問題』，ひつじ書房，pp. 311-324.

三上　章（1970）『文法小論集』くろしお出版。